

一般社団法人千總文化研究所 所長 加藤結理子

真宗大谷派寺院に伝わる法衣の数々

千總には法衣商であった当時の図案や文書、見本帳が数多くありますが、それを実際の法衣と照らし合わせるのが今回の調査目的です。

19年度は真宗大谷派姫路別院船場本徳寺（以下、本徳寺）ご所蔵の染織品約150点のうち約100点と、千總の所蔵する装束と打敷等の図案約300点を調査。2020年度は本徳寺ご所蔵の残り約50点と、真宗大谷派ご門首ご一族である大谷佳人様ご所蔵の装束類約60点を調べました。

染織品の内容は、以下の通りです。

調査対象となった染織品

<p>本徳寺ご所蔵</p> <p>装束類：<small>しちじょうげさ</small>七條袈裟、<small>おうひ</small>横被、<small>しゆたら</small>修多羅、<small>ほうも</small>袍裳、<small>どんじき</small>鈍色、<small>ごじょうげさ</small>五條袈裟、<small>そけん</small>素絹、<small>つけも</small>附裳、<small>どうふく</small>道服、<small>じきとつ</small>直裾、<small>まえごじょうげさ</small>前五條袈裟、<small>こどうふく</small>小道服、被覆、 <small>たたみげさ</small>畳袈裟、<small>わげさ</small>輪袈裟、<small>しゆじげさ</small>咒字袈裟、<small>ひょうこ</small>表袴、<small>さしぬき</small>指貫、<small>さしこ</small>差袴、<small>はんじり</small>袴、半尻</p> <p>荘厳具：<small>ばん</small>幟、<small>みずひき</small>水引、<small>うちしき</small>打敷</p>
<p>大谷佳人様ご所蔵</p> <p>装束類：<small>ごじょうげさ</small>五條袈裟、素絹、道服、<small>こごじょうげさ</small>小五條袈裟、前五條袈裟、畳袈裟、輪袈裟、咒字袈裟、指貫、袴</p>

年記が確認できた中で最も古かったのが、本徳寺ご所蔵品の中では安永2年（1773）製の七條袈裟・横被、大谷佳人様ご所蔵品では文政11年（1828）の五條袈裟でした。

ちなみに袈裟は元々端布を綴り合せたのが始まりで、五条（條）袈裟は5条の布を、七条（條）袈裟は7条の布を縫い合わせたものを指します。真宗大谷派では七条袈裟・横被が第一の正装とされ、格式の高い儀式で着用します。



Fig. 1 〈赤桐鳳凰切交 七條袷・横被〉安永2（1773）年 本徳寺蔵



Fig. 2 〈白紗平金八ツ藤 五条袷〉文政11（1828）年 本徳寺蔵

法衣の形式には、公家文化が深く関わっています。以前、当研究所の講演会で山口昭彦先生からお話がありましたように、京都の寺院では、天皇や公家の子息が門跡寺院に入り、またご門主の夫人は公家や宮家から嫁がれているため、宮中のしきたりや文化が受け継がれてきました。

紋様にも見られる公家装束の系譜

公家装束の系譜は、有職文様（ゆうそくもんよう）にもうかがえます。近衛家の衣紋である「抱牡丹（だきぼたん）」、あるいは「八藤紋（やつふじもん）」や「躑躅立涌（つじたてわく）」などが今回の調査でも見られました。

中でも多いのが「抱牡丹」です。これらは東本願寺は教如上人が近衛前久の猶子（ゆうし）となったことで近衛家から譲られ、真宗大谷派の御紋となったもの。着用者それぞれの御自紋で、少しずつ蕾や葉の形などが異なっています。

本徳寺ご所蔵の装束に見られる抱牡丹



紅青白緯綾地白沈織抱牡丹 御袍装
明治二十八年乙未四月新調
皆山邸
3-0030



たとう紙なし
4-0021



たとう紙なし
4-0013



たとう紙なし
4-0004

大谷佳人様ご所蔵の装束に見られる抱牡丹



棕色綾地白浮織抱牡丹 御五條
慶應二年寅二月御新調
亀印
御用 御装束師 千切屋惣左衛門
004



紅青色綾地白沈織御自紋 御袍装
慶應元年
御用 御装束師 千切屋惣左衛門
014

【参考】千總所蔵の見本帖に見られる抱牡丹



深層院様御自紋 五條装束
天保13年御新調
見本帳20200305-03-04-02

Fig. 3 発表スライドより本徳寺ならびに大谷佳人様ご所蔵品に見られる抱牡丹

牡丹には他にも、立牡丹、笄牡丹、蟹牡丹、雲牡丹などのバリエーションが見られます。それらの中の「緑綾地小葵雲紋金欄輪袷裳」が、千總が所蔵する図案と一致するのを確認することができました。

牡丹のバリエーション



開光院様 御五條
御用達 法衣職 長澤清七
2-0026



(緑綾地小葵雲紋金欄輪袷裳)
2-0036-1



白片地緯平金白浮織蟹牡丹乱紋 御五條
萬延元庚申歲霜月御新調
御用 御装束師 千切屋惣左衛門
012



(茶綾地宮牡丹紋輪袷裳)
2-0036-2

【参考】千總所蔵の図案に見られる雲牡丹



Fig. 4 発表スライドより牡丹紋のバリエーション

畳袷裳、輪袷裳を中心に、八藤紋も30種類ほど見られました。千總が所蔵する凶案「散雲八藤」と一致するものは残念ながらありませんでしたが、ご発注や製作過程の調査が進めば、これだけ数がありながら一致するものがない理由も明らかになるのかもしれませんが。

八藤紋のバリエーション



Fig. 5 発表スライドより八藤紋のバリエーション

他には立涌八藤、あるいは唐草、菊に鳳凰、龍などが多く見られました。またエキゾチックな果実花文様やペイズリー風の文様など、現代の私たちの目にもモダンな文様もあります。



Fig.6 〈白本緞子立涌八藤 道服〉 萬延元（1860）年 本徳寺蔵

織組織や色数が示す豊かな染織文化

装束とよばれる衣服は通常、高度な織の技術で成立しています。今回調査した染織品にもさまざまな技術が確認しました。

一例として挙げます〈玉虫色平織 附裳〉（Fig. 7）は、上部は萌黄色ですが、下の裾部分は茶色に見えます。上下で違う生地を用いたかのように感じさせますが、これは経糸に緑色、緯糸に紅色の色糸が用いられていて、生地の縦横を変えて仕立てがされています。他にも赤と青の色糸を経糸と緯糸にそれぞれ用いて紫の表れ方に変化をつけたものなどがありました。



Fig. 7 〈玉虫色平織 附裳〉 本徳寺蔵

また色名は37種に及びました。それらは白、黒、紫、赤系から黄系、緑系、青系、茶系とに分類されまして、たとえば赤系には紅、紅鳶、紅檜皮玉虫、紅梅、紅木蘭、紅鼠色、赤、緋、葡萄色、紅糝などがあります。ただし同じ「緋」と名付けられた色にも、現物には幅があるので、実際にどのようにお色を決めていたのかは興味深いところです。色の指定が法衣商の示す見本によるのか、ご依頼主がお持ちのものをもとにしたのか、なども今後解明してゆきたいと思います。

いずれにしても、ここに見られる雅やかな色名にも、豊かな染織文化の存在が感じられます。

出入りの法衣装束商について

話が前後しますが、ここで墨書（ぼくしょ）についてご説明します。これまでご紹介した染織品の多くは、畳紙（たとう）に包まれていて、その表には、中身の名称、紋様名や色名のほか、年号、法衣商の名が記されています。墨書と中身が明らかに一致しないもの、墨書の項目が乏しいものも多いのですが、今回の調査では、墨書の二つ以上の要素が

当てはまるものは、中身と一致するものと推定しました。先述した装束の名称や紋様名、色名は、いずれも墨書に従ったものです。

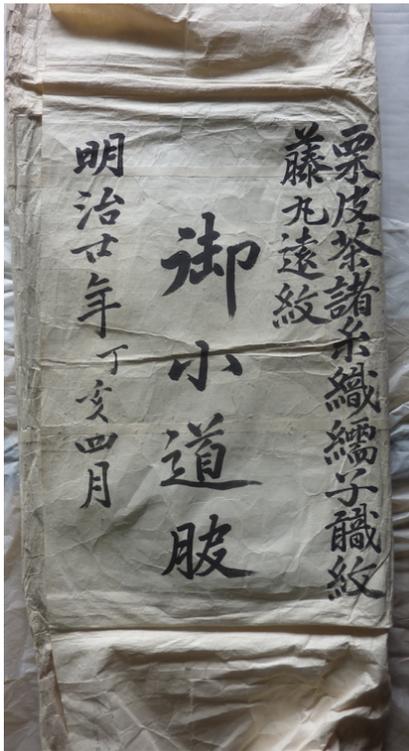


Fig. 8 装束が包まれているたとう紙とその墨書

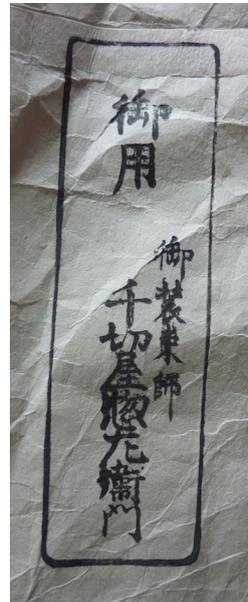


Fig. 9 御用 御装束師 千切屋惣左衛門の印

千總の前身である千切屋惣左衛門を含め、近世の法衣商がどのように活動していたのかも、本調査の重要なテーマでありました。結果、墨書で確認できる法衣商は12軒。そのうち、活動期を示す年号の記載を伴うのは9軒でした。

もちろん前後はあるでしょうが、確認できた範囲で活動期が最も長いのが長澤清七でした。千切屋惣左衛門については、本徳寺ご所蔵品で1828～1896年、大谷佳人様ご所蔵品で1840～1887年という年号が確認できております。

ただし、その表記は「御用達 法衣職」「御装束師 御用」「御用 御装束師」など様々です。そもそも「御装束師」という職業名がいつから使われだしたのかも不明ですので、法衣商の実態とあわせ、今後の課題としたいと思います。

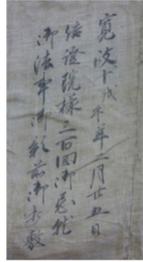
なお調査品には、装束以外にも打敷、水引といった本堂を荘厳するための染織品もたくさんありましたが、これらには畳紙に包まれているものはなく、それぞれの裏面に直接墨書がなされていました。墨書の内容は、寄進された方々のお名前や目的などの由来です。

打敷・水引



(明黄織子地八藤抱牡丹紋様打敷) 1798年

最大幅：346.0cm 最長：280.0cm
辺長：199.5cm・126.5cm・253.0cm



寛政十戊午年二月廿五日
信濃院様三回御忌口
御法事御口前御打敷 寄進人
廿五日御報謝講中



Fig. 10 発表スライドより打敷と水引

報告の終わりに

この2年でようやく、調査研究の入り口に立ったところというのが正直な感想です。今後も引き続き、染織品の時代性や特色、千總にある文書類の整理を進め、法衣商がどのようにご注文を受け、製作していたのかなど、研究を進めてまいります。多くの方に興味をお寄せいただき、ご一緒に解明してゆけたらと考えております。